フレーベル賞入選童話

一等

鼠さんのお引越し

相田多惟

鼠さんのお家がありました。其れはお爺ちやんのお家のお臺所の天井の上にありました。其處には大きなお父さん鼠と中ぐらゐのお母さん鼠とそれから小さな三匹の仔鼠さん、お名前はね、お兄ちやんが一郎ちやん鼠、その次が二郎ちやん鼠、一番お終ひが三郎ちやん鼠つて言ふの。それだけの鼠さんが住んで居りました。

此の鼠さんのお家にはお倉もあるのよ。

天井の壁に穴をあけて色んな物をしまつて置くの。どんな物が入つて居るでせうね？

大きな菱餅のかけらが入つて居るのよ。それはね、何時だつたか力の強いお父さん鼠がお雛段の所から「ヤツコラサ、ドツコイサ」と引つぱつて來たの。それからお人蔘の頭も入つて居るのよ。之れはをゝゝひの夜、お母さん鼠が下のお臺所からドツコイショ〳〵と持つて來たの。それから未だ入つて居るのよ。一郎ちやん鼠の持つて來た馬鈴薯、二郎ちやん鼠の引いて來たビスケツト、それからね、石鹸も入つて居るのよ。これはね、一番小さな三郎ちやん鼠が昨夜お湯殿から「ヨイチヨ〳〵ヨイチヨ〳〵」とお顔を眞赤にして運んで來たの。でもね石鹸は美味しく無いでしよ。だからお父さん鼠が「そんなの捨てゝおしまひよ」つて言つたんだけど三郎ちやん鼠が「イヤ〳〵〳〵〳〵」つて言ふのでたう〳〵お倉の中へ入れて置く事にしたのよ。

下のお家のお爺ちやんは、天井の鼠さんが色んな物を持つて行つてしまふし、夜になると「ド

タバタ〳〵騒ぐでしよ、だから餘り五月蠅いのでたう〳〵小さな眞黒けの仔猫さんを飼ふ事にしました。

そんな事は知らないので、或る晩一郎ちやん鼠と二郎ちやん鼠と三郎ちやん鼠の三匹の仔鼠さんは、又こつそり下のお臺所へ降りて行きますと、今までに見た事も無いお耳の尖つた眞黒けの動物が寢て居るので吃驚しました。

あら何でせうね？、さう〳〵お猫さんですね。でも三匹の仔鼠さんは未だ一度もお猫さんと言ふ物を見た事が無いので、お味噌桶の蔭にかくれてそーつとのぞきました。

「おや、あれは何んだらうね」

「黑いからやつぱり鼠かしら」

「でも一寸違ふね」

「そばへ行つて見ようか」

「喰ひ付くと恐いよ。お母さん呼んで來ようよ」三匹の仔鼠さんは相談してお母さん鼠を呼びに行きました。

お母さん鼠は何だらうと思つて、天井から覗いて見るなり吃驚してしまひました。

「あら〳〵、お前達あれは恐い猫つて言ふ物だよ。こんな處でぐづ〳〵して居て見つかると喰べられてしまふよ。さあ〳〵早く早く」お母さん鼠は三匹の仔鼠さんを連れて急いでお家へ歸つて來ました。そして其の話をするとお父さん鼠もやつぱり吃驚して、

「そりや大變だ。ぐづ〳〵して居ると其の猫に喰べられてしまふ。さあ〳〵すぐにお猫さんの居ないお家へお引越しゝませう」

お父さん鼠とお母さん鼠はあわてゝお引越しの仕度をしました。さあ〳〵皆でお倉から色んな物を出して持つて行きませう。お父さん鼠は大きなお餅のかけらを、お母さん鼠は人蔘の頭を、一郎ちやん鼠は馬鈴薯を、二郎ちやん鼠はビスケット、それから三郎ちやん鼠はあの石鹸

を、皆それぞれかついでこつそりお引越を始めました。お父さん鼠はお猫さんに聞えない樣に小さなお聲で、

「お父さんが一番先に歩くから其の次が一郎ちやん、二郎ちやん、三郎ちやん、そして一番お終ひがお母さん。良いかね。そつと歩かないとお猫さんに見付けられて喰べられてしまふよ。解つたね。ソーツト歩くんだよ。さあ出掛けよう。それソーツト、ソーツト、ソーツト」

「ソーツト、ソーツト、ソーツト」

「ソーツト、ソーツト、ソーツト」

皆、重いお荷物を脊負つて音のしない樣にそつと歩きました。お天井は眞暗でうつかりすると電燈の線に引掛つて轉びさうですよ。でも皆氣を付けながらそつと歩きました。

すると向ふの方に何だかよく光る眼が二つじつとこつちを見て居ります。お父さん鼠もお母さん鼠も三匹の小鼠さんも吃驚して柱の蔭へ隱れました。

「お猫さんかな」「お猫さんよ、きつと」

「恐いなーー」

三匹の仔鼠さんはお母さんのお腹にかじり付いて小さくなつてふるへました。でも變ね、其の眼は一寸もこつちへ歩いて來ませんよ。

「變だな。お猫さんの眼にしちや。一つ々々の大きさが一寸違ふな」

お父さん鼠はそう思つたので小さなお聲で聞いて見ました。

「誰ですか、其處に居るのは?」

でも其の眼は默つて居りました。

お父さん鼠はもう一寸大きい聲で聞いて見ました。

「誰ですか、其處に居るのは?」

でも其の眼は默つて居りました。お父さん鼠はもつと大きい聲で聞いて見ました。

「誰ですか。其處に居るのは？」
でも其の眼はやつぱり默つて居りました。
「變だな、お猫さんぢや無い樣だ。一寸行つて見て來よう」
お父さん鼠はこはゞ〳〵そばへ行つて見ますと急に後を向いて笑ひ出しました。
「何だ節穴が光つて居たんだつけ。下の燈が映つて丁度お猫さんの眼の樣だつたんだよ」
まあ良かつた事、お母さん鼠も三匹の小鼠さんもやつと安心しました。そして前の樣にお父さん鼠を先頭にして、お荷物をかついで又ソーット〳〵歩きました。
少し行くと急に誰かが
「其處を通るのは誰だ？」
と言ひました。お父さん鼠もお母さん鼠も三匹の仔鼠さんも吃驚して飛び上りました。
すると其のお聲が又、
「なーんだ鼠さんか。お揃ひでごちらへ？」
と前より優しい聲で言ひましたのでお父さん鼠はほつとして良く〳〵見ますと大きな蜘蛛さんが網にぶらさがつて居りました。
お父さん鼠は
「あゝ吃驚した。おぢかしつこなしですよ、蜘蛛さん。實は此の家でお猫さんを飼つたので家中揃つてお引越をする所ですよ」
と申しますと蜘蛛さんは
「おやそれは失禮しました。ごめんなさい。うつかり此處を通られると私の網が破れてしまふんです。一寸待つて下さい。急いで網を除けますから」
蜘蛛さんはさう言つて網を除けて皆を通して呉れました。お父さん鼠もお母さん鼠も三匹の仔鼠さんも良かつたねとお顏を見合はせて蜘蛛さんにお禮を言つて通りました。

又少し行くとお爺さんのお家とお隣りとの境に來ました。でも困つた事には其の間が廣く開いて居るので、皆一人々々飛んで渡らなければなりませんよ。それにお荷物を持つたまゝぢやどうしても飛べませんもの。お父さん鼠とお母さん鼠は色々相談しました。さう〳〵、一人向ふへ渡つてこちらのお荷物を受け取つてもらひませう。お父さん鼠は力が強いから投げる役、お母さん鼠は受取る役。さう定めてお母さん鼠は「ピョン」と向ふへ飛びました。

さ今度は一郎ちやん鼠が飛ぶ番よ。何んだか廣くつて恐いな。でも元氣を出して飛ぶ用意をしました。さあ「一」・・「二の」・・「三」おつとつとつと恐い々々。どうしても飛べないんですよ。だつて足がすくんでこつちのお家から離れないんですもの。今度は二郎ちやん鼠の番。

さあ「一」・・「二の」・・「三」駄目々々やつぱり駄目よ。今度は三郎ちやん鼠の番ね。

「一」「・・・「二の」・・・「三」やつぱり飛べないの。向ふのお家に居るお母さん鼠もこつちのお家に居るお父さん鼠も本當に困つてしまひました。さう〳〵良い事がある。それでは仔鼠さんもお荷物の樣に受け取つて貰ひませう。

お父さん鼠は一郎ちやん鼠をかゝへて「一」「二の」「よいしよ」と抛りました。お空をクル〳〵とボールの樣に飛んで來た一郎ちやん鼠をお母さん鼠は「よいしよ」と上手に受け止めました。今度は二郎ちやん鼠の番ね。ほら「一」・・・「二の」・・・よいしよ」お母さん鼠は上手に受け止めましたよ。其の次は三郎ちやん鼠の番ね。ほら一、二の、よいしよ、お母さん鼠はやつぱり上手に受け止めましたよ。

まあ良かつた事。三匹の仔鼠さんはお父さん鼠の手からボールの樣にお空を飛んで來たのが面白くて、お手々を叩いて喜びました。

今度はお荷物の番よ。最初に大きなお餅のかけら、それからお人蔘の頭、馬鈴薯、ビスケット、そして一番お終ひに石鹸ね。お父さん鼠は上手に投げましたよ。お母さん鼠も上手に受け止めましたよ。そして一番終ひにお父さん鼠がピョンと飛んで來ました。

もうこれで皆渡つてしまつたのね。さ又前の樣に行列を作りませう。お父さん鼠はお餅を持つて先頭よ、其の次は馬鈴薯を持つた一郎ちやん鼠でしたね、其の次がビスケットを持つた二郎ちやん鼠、そして石鹸を持つた三郎ちやん鼠、一番おしまひがお人蔘の頭を持つたお母さん鼠でしたね。さ、歩き出しましたよ。もうソーット歩かなくたつて良いの。此處にはもうお猫さんは居ないんですもの。皆元氣で歩きました。そしてほらさつき節穴を猫さんと間違へた事や、蜘蛛さんに叱られた事や、お家とお家の間を飛び越して來た時の事を色々話し合つたり笑つたりしながら新しいお家へお引越しゝて行きました。

おしまひ

二等

逃げない小鳥

佐藤久子

もうすぐ冬になります。

山では木の葉が紅くなつて、つめたい風が、遠い北の方から吹いて來ました。

高い木の上で小鳥のお母さんと子供が、

「もうそろ〳〵暖かいお家を見つけなくてはならないね」

とお話をしてゐました。

たべるものもあまりみつかりません。お母さんが小さい小鳥に云ひました。

「今頃になると、村の子供が鳥籠を持つて、お前のやうに小さい可愛いゝ鳥をみつけに來るからね、食べものを見つけるときも、よほど氣をつけないといけないよ」

子供の鳥は「うん〳〵」とお返事をしながら、早く飛びたくて飛びたくてたまらないやうに羽